人と自然がつながる町で。

ゼロから始めたワークキャンプ

強制されるわけでもなく、自然とみんなが主役になって、このプロジェクトにとりくんでいた。そう、今後続いていく活動になった。これ、ほんとすごい。この土地や仲間が好きにならないとできないこと。

その日は澄み切った青空がどこまでも広がっていた。秋も深まりゆく11月。

県内外から6名の参加者を募り、森づくりのプロフェッショナルを講師に招いて、2泊3日で開催された第1回里山保全・森づくり人材養成講座。里山保全・森づくりの基礎知識・技術の習得とその実践と、地域に貢献するボランティア活動のあり方をめぐるワークショップ。「実践」×「ワークショップ」の両輪で持続可能な活動のしくみをつくることが、この講座の目指すもの。

刻々と開始時間が近づくにつれ、東京都・愛知県・愛媛県・福井市・三国町から粒揃いの社会人が集った。さまざまな職業、それぞれの思い。共通していることといえば、誰ひとり森林に関する知識も、林業の経験も、持ち合わせていなかったこと。

緊張の混じる中、オリエンテーションが始まった。重油回収ボランティアの際に、全国から押し寄せた大勢のボランティアで混乱する現場を、地元JCとしてコーディネートした長谷川さんの、汲めども尽きぬ経験が、まっすぐ参加者に伝えられていく。何もないところから井戸を堀り、電気を通し、三国で開拓農業を始めた山崎さんの、みどリレーの思いを聞いた。自分がゼロになったとき、果たして何ができるだろうか。胸が熱くなった。

車はフィールドに向う。それまで全く知らなかったマツ枯れ。予想をはるかに越えて荒れていた。どこからか森にゴミを不法投棄していく人が増えたという。

森のかたちは光を求める植物で決められてるんだ。下刈や間伐など一つ一つの作業が説明されながら、実技講習が始まる。初めて触れるチェーンソー。エンジンのかけ方を教わり、木の倒れる方向を見極める。その眼差しは真剣そのもの。枯れマツが倒れる手ごたえ。森に関わっている実感。想像以上に楽しい作業だ。自分たちの手が加わって、マツ枯れの森が姿を変えていく。夕日が指したフィールドに、あたたかな感触が残る。将来の森を見に来たいと思った。

作業を終えると、ワークショップがスタート。3日間を通じて、3月に実施する同じ講座のプログラムを「ゼロから立案する」という課題が設定された。「多くの人が参加したいと思うプログラムとは?」「どのような仕組み・仕掛けが必要だろうか?」。限られた時間の中で、アイディアを出し合い、検討を繰り返して、議論が深まっていく。現在進行形でプロジェクトが生まれている。ワクワクした時間が流れてる。今朝初めて顔を合わせたばかりなのに、ひとつの熱気に包まれている。みんなの歯車が、ぐっと動き出した。

夕食はみんなで自炊。今夜のメニューは鍋に決めた。買出しに10分も走れば、そこは九頭竜川の河口、日本海への入口。町屋が軒を連ね、ゆったりとした時間が流れている。湊町ならではの風情を感じながらの街中散策、食べ歩きもできる。早くも明日の昼休憩が楽しみだ。空腹にしみる食材は、全部地元でとれたもの。地元の方も加わって、アツアツの鍋に会話が弾み、顔がほころぶ。夜が深まるにつれ、3日間の短さを感じていた。

地域を愛する人がいる。その地を訪れる人がいる。人と自然がつながる町で、ゼロから学び、つくりあげた3日間は、これからも続いて行く。

このプロジェクトのよさは、汗を流して、参加者のみんなと体験を共有することだけじゃなくて、**地域に実際にある問題の解決**にとりくんでいること。

第1回目となる
里山保全・森づくり人材養成講座
テーマは「実践」×「ワークショップ」